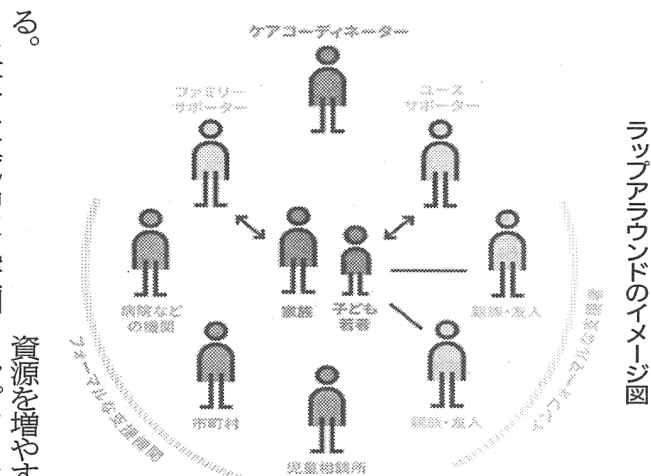


オープン カレッジ

こどもを取り巻く社会状況は、児童虐待・不登校・自殺は増加を続け、こどもの貧困も深刻である。助けを求められず、さらに重篤化していくケースが多く見られる。行政機関による対応が頼みの綱となるシステムの限界が来ていると考えられる。この状況の打破のためにラップアラウンドというアプローチに注目している。

1980年代に米国で生まれたラップアラウンドは長期に施設や病院に入ったこどもが家族や地域とのつながりが切れて居場所を失い、結果的に予後が悪くなるという点に注目し、家庭を離れる状況になる前に困難を抱えるこどもや家族を

こども支援の地域包括アプローチ



く、ラップアラウンド終了後に、問題が生じても適切な相談先を持つこと、家族という名前の車の運転席に当事者が座って運転できる力をつけることである。そのため、地域に活用できる

る。当事者を真ん中に児童相談所、市町村の関係課、学校などの公式な支援機関・支援者と親族、友人、職場の同僚などの非公式な支援者がチームを作って、こどもとその家族の状況を改善するためにチームで支援プランを考え、それを実行していく1年から2年間のプ

ラップアラウンド通じて

社会につながり取り戻す

包み込んで地域で包括的に支援を行うことを提唱し、それを「ラップアラウンド」と名付けたところから始ま



日本福祉大学
社会福祉学部准教授
久保 樹里

くぼ・じゅり 子ども家庭福祉。日本女子大学大学院人間社会研究科社会福祉学専攻博士後期課程満期退学。児童相談所勤務を経て、現職。

ロセスである。

ラップアラウンドでは、まず家族の強みや家族がどうなっていきたいのかをこどもや家族から聞くことから始める。ラップアラウンドは当事者の「ために」ではなく、「ともに」を重視し、対話を進める。チームで作った支援プランをそれぞれが実行し、それをふりかえる。うまくいけば皆でお祝いをし、うまくいかなければ検討して、修正を繰り返す。

現在、日本版ラップアラウンドのケアコーディネーター養成研修を開催するとともに、自治体や施設、民間団体などモデル実装先の方々に伴走している。施設からの家庭復帰や自立支援、里親家庭への支援など興味深い実践事例が蓄積されてきている。ラップアラウンドを取り入れると当事者の変化だけでなく、支援者も元気になってくるという報告も多いのが興味深い。今後とも人と人、人と地域がつながる社会に向けて、この活動が続けたい。